松浦佐用媛石魂録

後編

壹

913.5
マ
後篇 1

曲亭主人著
溪齋英泉画

松浦佐用媛石魂録

東京金玉出版社

石魂録後集序

物之全成必有時矣先朝所不有後王紹之前史所不足後儒補之是以史記有褚先生之補類史有菅諸生追加降迨若水滸傳非亦成於一人之筆者也予所著石魂録前集三卷文化丁卯夏日應于書肆雙鶴堂之需創之雖當時有後集全梓之訂約未暇其著遂歷數年雙鶴堂就木

焉。是故前集亦隨廢刷印云。時坊賈千翁
軒。以介購得其剞板。因欲請於予令爲全
書。自是之後。討求累年不已。以其請稍久
故。予意聊赴之。今茲肇秋曝書間。取曩篇
三卷讀之。邈然如隔世者。即緣舊案以發
新研。黽勉續稿焉。未至數月。本篇七卷方
成。此後集之所以刋布于世也。蓋人情數
舊走時好也。是擧也既後時好。又索自售

寔獲免忘蹄者之所爲。非予之志也。然自
是書有前集。二十有一年于茲。物之全成
必有時矣。予之所未悉不俟後人之資手
自續全之顧彼造物者。倘使吾蓄壽不徒
地。豈得而至於此哉。自笑叨題于簡端。

文政十年丁亥冬十一月小寒前一日

曲亭主人撰

東京金港堂出版社

松浦佐用媛石魂録後集摠目録

巻之一

第十一回　渡海船中少年清談
第十二回　動磯高濤引亡骸

巻之二

第十三回　神明監誠烈女得志
第十四回　逆旅初厄被侠者釋

巻之三

第十五回　辨雞鳥無名氏垂警
第十六回　良僕夢寐摧美玉

巻之四

第十七回　再阨僅解遭舊僕
第十八回　認假爲真必有因

巻之五

第十九回　五十毬宿親族再聚
第二十回　釋舊怨譙贖新怨

巻之六

第廿一回　執念入利鎌追夫妻
第廿二回　乾坤九中亦復聚親族
第廿三回　賢寧凱旋大團圓

巻之七

通計二十三回前集題目十回共為廿三回其十回以上見前集第一巻簡端後集摠目録終

前身不識何説後身

浅すゝの
虫やと
花よ見て
枝に
あそぶ蝴蝶乃
果しめてこそ

新羅國
胡子和

瀬川浦二郎選如

五十嵐
絲萩

耳食遭親
寛家何
處
おりひ家や
焚ふく
と家を
輪かさゝ
粥をけらよ
うゝゝ面ゝゝ

村山俊平

偏哲斧
追蝮

船場
輪栗

去留儘風
真別世界
ちりの難かとの
迫門と舟人
渡りて
わかる

学問をあるこの形

前筑紫探題
経高

浮貧の
伊加太

擂垣轉馬

千變萬化
在汝術中
まぢなまちく
ゐ拔まる家
かひや蛤乃
ちりかゐ
ちりかゐ
けるる

海原澳進易速

姥歌三郎
得時

松浦佐用媛石魂録後編卷之一

東都　曲亭主人編次

第十一回　渡海の船中に少年清談を

再、説。瀬川来女吉次は。牛淵九郎清繩が。逃去れば追ふく思いぢも雪中に其迹を喪ひ。路次の疲勞を慰んが爲に。肥前州末の龍華なる。白屋に宿りを討て。計ぢも實母玉島家弟浦二郎に琛會。越ふ初く年来の宿願を果をものうち。母玉鳴は其弟清繩が爲ふ自殺しく。且子共の爲ふ公道を全うし。清繩も亦先非を悔く。首級は伯乃吉次ふ贈らん爲ふ刃ふ伏しさり。かくる折うち鎌倉の執權。北條相摸守時宗朝臣の使者としく。吉次が妻の父。博多彌四郎が親族なる。博多倍太郎正延。鎌倉より到着しく。執權の仰を傳へ。即便吉次を召返を。歸路の船出と促しく。然れども吉次は。今更母の亡體を。見捨く遠く東路ふ。立歸るべ如よしのなれば。柩送りを果をまで。霎時の猶豫を乞けるふ。正延も其孝義を感じて。遂ふ其意ふ任しつ

張仲階が妻の故事は伊々里の段に至りてつぶさに云べし

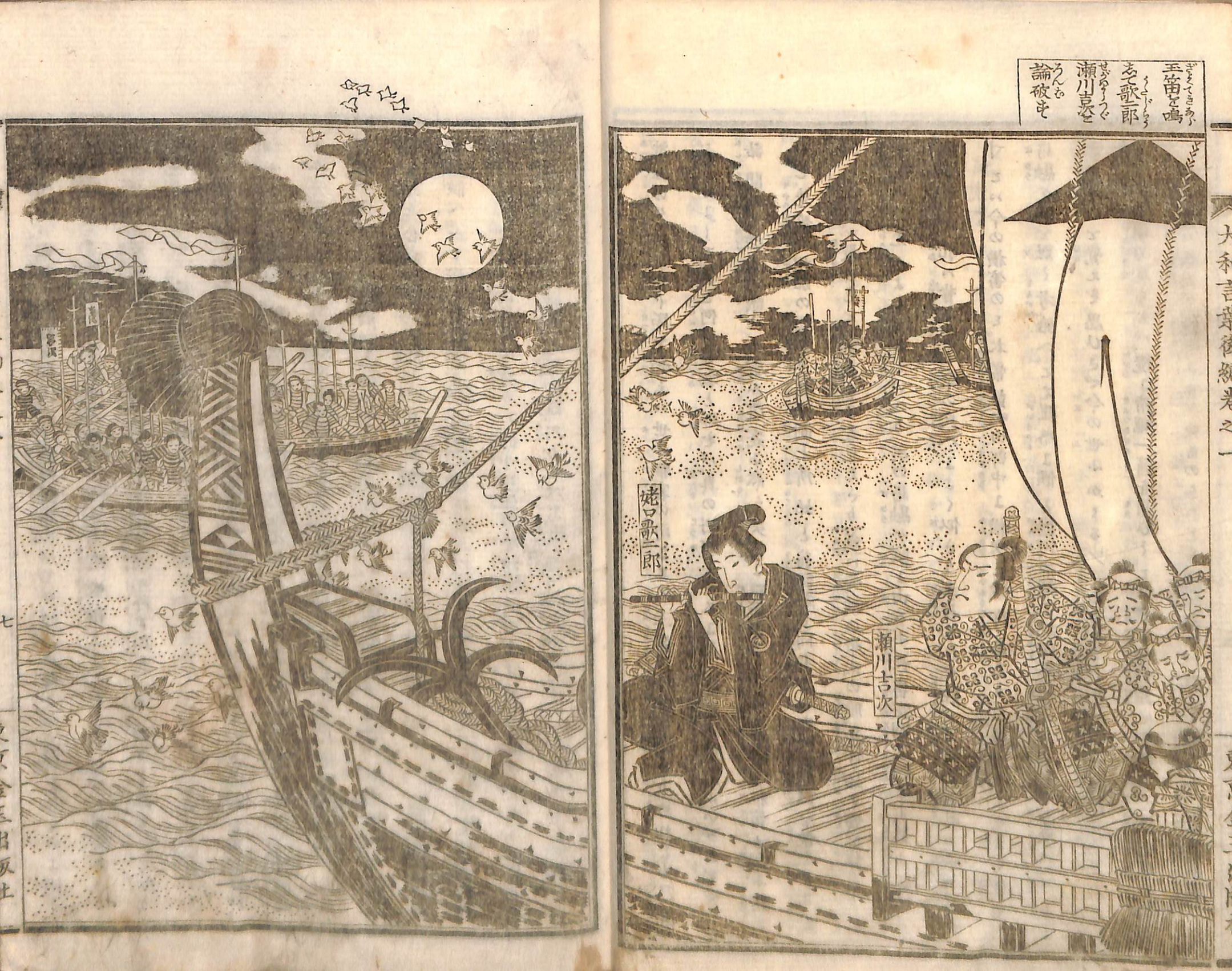
く。旅宿へとくゞ歸りをける是はでゝ前集おる。第十回の結局おれば。世の人の知る所おれども。既ゐ居多の歳月と歴く。今後集と續出せば。只末を視て本と得おらず。思ひ惑へる人しもあらん歟。よりく遣忘に備ん爲に彼崖略と舉るのを。前説休題。有然程に。瀬川采女吉次ゐ。弟浦二郎と相計く。次の日母の亡骸。と外叔父清繩が。亡骸をも櫃に斂めく。程遠からぬ菩提所おる。山寺に葬る程に。里人等も是を資けく。柩と送る者多らり。そが中に日ごろ親しき揃と雖も。動それば。吉次と浦二郎と認違て。應答不都合おるものゝ。緣由と稍聞知りく。駭嘆せざるゐなりけり。宜おるらゐ瀬川采女と。浦二郎ゐ双兒にく。其相貌の肖さるゐ更え。物のいひざゐ。進止。咬逆くまでも孰と兄。孰と弟。とも兄難ければ。彼張仲階が妻のをゐ。母玉鳴をら初對面に。吉次と認て浦二郎ゐと。思ひ違へしゐ疎忽に似く疎忽にゐ非ざりき。と思ふも甲斐おき恥兄弟ゐ。過去らさと胸にのゝ。偲ぶに餘る袖の露。檐下の垂氷凍解て。荒たる籬笆に咲く梅の。世ゐ春おがら春おらぬ。憂身ゐ衰れ淡雪の。消るに早紀庭面と。見つゝ思へば會者定離。人世無常迅速の。理りを觀てゐ家腐籠の看經も。果敢おき香の烟より。立とゝもおき日數歴く。そゞ初七日になりにけり。かくりし程に浦二郎ゐ。叔父清繩が云々と。説道くさる繹の趣。此度吉次が歸路の危難と拯ふべ紀計策。箇樣〳〵と聟くと。吉次聞て頭をうち掉る。これも亦牛淵ぬしの。臨終にいゐれし事。彼八の弓人ともく。代よとある謎くゝを。和殿の註をまさで解さり。そゐ其意と問れん歟。八の弓人と合をれば。是弟といふ文字ゐ非ずや。和殿とこれゐ面影の。こ紀がさ紀までよく肖さり。かくれば此度和殿ともて。こが身の如く打扮して。鎌倉へ遣をとも。誰ら吉次おらぎと思ゐん。其禍ゐ遭ふゐ及びて。和殿ゐ其處ゐ命を隕し。こが身ゐ獨恙おくとも。弟と殺して何ゐ為ん。禍あると聳て知ば。思ひの儘ゐ用心して。脱れ難くば天命ゐ。任をると是勇士の本意とも。彼讎ゐ一切從ひ難し。と云と浦二郎聞あへず。宣ふ趣。理りおれども。吾將の思ふよしと違へり既におん身を主君あり且經高征伐の。軍監として功おを紀に非ず。然るを本然の禍と。知りつゝ命と失ひ給ゐ。其身に損あるのをおらで。鎌倉殿の武威と隕さん。これ大おる不忠にあらずや。其ゐ又これと異へ。家に事ふべ紀親もおく。國ゐ使るべ紀君もおし。死して損おく。生て益おし。且亡

母の夜話より。聚てより聞るとあり。昔ひが同肥の生れしと云。鏡の宮の神の示現より。兄弟其性怜悧にて。ゐらも其才長されども。兄弟壯年ふしく厄難あらん。弟は母より養せよと。託宣ありしよしと思へば。只ひが家兄のみならず。其ふも亦脆れ難し。禍のあるべしかゝれば代るは代るは非ず。枉く此議ふ從ひ給へと。辭を盡しく諫しかば。吉次霎時沈吟ぐく。いはるゝよしも黙止難し。ゐらもあれども今さらふ。和殿ふひが身の打扮さして。鎌倉へ進さば。是唯君を欺くに。所詮同肥同船しく。鎌倉へ歸るべし。とは思へども卒爾に。再三再四尋思しく。緯の便宜ふ從んさのみを急ぎ給ひそと云は否ともいひらひしく。浦二郎も亦うち按ぐく。斯迄は宣ふ事の。目今規定せらるゝならねば。猶庭分を俟んのみ就く聊情願あり。亡母の世は在せし時。媒妁ありてひが爲は婚姻と結まし。當國彼杵郡なる伊萬里の庄の獅士はく。根塚氏の獨女。名萩とゝ云妙に。只結髮しのみふしく。未だ迎も取らざるよしは件の舅根塚氏。去歳の比より足痛の。持病起りて行歩恢はず。徒ふ日を過せども既はして秦晉の好を結びし事はしあれば。母乃身まゝり給ひし事も。又其も鎌倉へ赴くよしと彼人々は。報知せずば恨られん。ひが兄怙恃の憂はよりく。發足延引を給ふよしは博多氏より鎌倉へ。既ふ注進せられしならん。然らば其伊萬里は到りく。立歸り來る程の逗留は猶許され給はん。然りとても其程の。心もとなく思ひ給はず。強く行んと云ふは非ず。御身の意見いろふぞや。と問れて吉次うち領ぎ。ろはよくこそ告られさま。定ふ和殿のいへる如く。初七日ふありされども。倍太郎より催促おきは。忌の關ると待るゝもの歟。伊萬里はおゝと鄰郡ふく山河を隔し。旅おらねば。とくも帰り給へと云は浦二郎歡びく。猛は旅乃准備とさる。其實は同肥いもねられず。只行末を是彼と。語り曉しく八聲の鶏と。共ふ塒を出くも。弟と送る別れ路の。あふよしもなくおらんと。は後ふぞ思ひ合しける。有斯而其次の日は博多倍太郎が消息とく。奴隷使の齎し來つ。呼門高く名告をれば。吉次手づから受取りて。且その狀を披見るは最はは慈母の柩送りと。果おく後は參らんと。いはれし願事の黙止難く。實政朝臣ふ聞えあげて。既は七日の免許を得さり。かゝれば。けふより出仕しく。嫌と急ぎ給へ。其事は只今發足陸路を鎌倉へ馳歸て。此等乃よしと執權は聞えあげんと思ふ乃

ミ。舟行乃速おらぬまあらねど。又風濤の障りありて。船歌まいくむくの。日と費んも計難し。おゝとも〻同船せむ。委曲ハ東歸乃後ふこそ。餘ハ面會ふ磨すべけれ。匆々不備と書れしと。吉次屢々讀うへして。後悔をるを太うさならむ有之せバ浦二郎と。伊萬里へ出し遣るまゞ紀ま。彼歸り来て我とらむハ。出し抜けりと怨ミやせん。されバとて。今更ま一と日も俟るゝとをハ非す。切て一と毫遣さんとて。有つるよし狀如此〻と。書おるしさる陸奥紙の。おれぶの柔れ苦しくも。出居の柱ふ貼著つゝ。出仕の准備と急んとて。萌黄威の身甲ふ近属妻の秋布が。百首の歌を織做さる。恩賜の錦の戰袍と。綺羅やうふ衣下〜て。黄金造の大刀と跨。たゞ武者草鞋と穿占て立出んとぞおさりける。折うら瀬川が從者等ハ。綽の心を得さりけん。乘馬鑣供柳笠。僉うち揃ふて出て来つ。御迎ざふと呼門て。庭門狹〜と居おが れさり。吉次。遥ふ是と見て欣然として。清繩が。首級函連輿を若黨ふ門の戸開よといひうけて。閃りと馬ま打跨ると。目送る人もおき宿ハ。隣知ぞの長反歌。捷徑問へハ弓と弦。案山子ざも驚く矢田の津の。陣屋を指て急ぎ〻り。然程ふ。北條上總介實政ハ。此日瀬川吉次が出仕の聞えありしより。轅門ま敷皮布せて。且吉次ま對面して。牛淵九郎清繩が。首級實檢の作法あり。綽果て實政を。清繩誅伏の綽の趣。其顛末を問るゝま。吉次ハ些も隱さず。母玉島が義ま仍て自ら刃ま伏しさる事。清繩最後の爲体。弟浦二郎が事さへま。をべて遣おく報しうバ實政頻りま嘆賞して敵おがら清繩ハ。知命の勇士と云べ紀のミ況て玉嶋が義死の趣。この母ま〜おの子あり。最惜むべきものどもおりしと。泉下の人となりぬと聞バ。只追薦ままものおし。けふよりして後の佛支ハ。實政宜く沙汰せんま。是等の事ま懇念せでとく鎌倉へ歸るべし。抑此回執權の。吉次と召さるゝ事。御用何等と知ねども。一と七日を寛べしハ。情を奪ふま忍び無さる。實政が愛顧ハ。恨る所ハ經高を未だ一時ま攻潰さぬ將角の勢ひあるま似されど。速らぬ〜彼賊將を。擒ませんと蛾ひおし。より〻愚按て回らをま。西海の亂ぬより。綠林鄰帆處々ま起て。渡海と云ども容易うらぬ。今又是ま加るま清繩が飛蘭渡の殘兵。脱れて海賊とおらんまハ。又是忌々し紀大事ま。和殿て乃度舟行を歸らバ。是等の穿鑿肝要おらん。これ百名の勇士を擇て。和殿の援とおをべ紀ま。其通途功あらバ謝せ

ぞ〜く遅滞の罪を。贖ふまで足りぬべ〜。博多ゐ今朝〜も陸路と立ぬ。今更まで遅々もべららぞ。軍船ゐ湊まあり。何まおりとも乗給へ。誘とく〳〵と急〜く。身の暇賜〜らば。吉次一議まで及ぞおく。言受〜つく思ふやう。大将軍配遠慮まで過く。今百名の兵士もて。其と送ら〜給ふゐ。必途まで禍の。あるべきよ〜と知れ〜歟。もし不用意まして。この議あらば。そゐ神佛の冥助おらんと。思へば歸帆まで勇ましあり。欣然と〜て辭〜去りて。驀く湊口まで赴く程まで。彼百名の兵士等。一箇〳〵まで名簿と捧げて。吉次が従者共侶まで。一船まで乗たりける。此時矢田の陣中まして。手と負るもの病あるもの。吉次が船まで附て。鎌倉へ歸らんとて。港口を投て来る者あれども。吉次一箇も是と許さず。もし便船と請ふ者ありて。竊まで同船せ〜むるおらば。其罪是彼等〜からんと。最も緊〜く徇知〜て。皆悉追返せ〜まで年尚若き一箇の男いうまらしけん兵士等まで。財物多く賄賂て。一箇便船おさまを〜を。吉次も従者も知者絶ておらりけり。然る程まで。其日順風おりければ。船ゐ忽地岸と離れて。東を投て走らもる。水主篙師の棹の歌まで。波の鼓と調添て。水鳥驚く横日影。朝霞暮雲まで入るらと怪ましき。奇巖孤松の最妙おる。磯打風まで清韻暢ひて。巨鱗群飛ぶ盈虛潮。折々揚る漁舟の竿も。これ狀慰るまで似さりけり。目まで視るもの珍〜く。耳まで聞くもれ新まして。日和さへおまうち續けば。斯て行と行程まで。長門州大津郡。阿川の出崎おる。向の浦と離るまと既ふ〜く八九里許。春の海面月さ〜升て。白晝よりも猶明らりけるふ。怪〜むべし此船の艫の方まで人ありて。横笛と抜出〜。清涼と〜て吹遊む。餘韻四下まで響紀々り。吉次是とうち聞く。訝〜やとゞ船ふく。斯迄笛と吹ん者。有と〜もおもはえぞ。誰ふもあれ其者と。とく將て參れ。と下知をれば。一箇の従者承りぬと應もあへぞ。筥推揚て。彼癖者と引立来つ。蓬廂まで推居ける。折らら限ふ紀月と燭まで。吉次熟是と見るまで。齡ゐ十六七らと覺く。色白く〜て眉秀。唇赭く。眼光の。平人おらぬ正見えさりける。此是一個の美少年。膚まゐ皂衣と被く。手まで横笛ともてりけり。當下吉次勃然と堂高やらまで。やとれ少年。とれ西征の軍監と〜て。無て捕盜の命と稟さり。是まより同船の士卒一百名と。とゞ従者の内おらぬ。矢田陣中の病者ぐふも便船を許さゞ〜ふ。況甚歷おる便まと得く。とゞ此船ふ附来れる。思ふふ敵の間者おらん。明々地ふ首伏せよ。とくいはゞや。

と謹問へば。少年は遽しく。拿さる笛を腰ゐして。跪坐つゝ陳ぜるやう。御疑ひは理りゐれども。其惡意あるも乃おらぎ。いうでゥ敵乃間者おるべ坐。親は太宰府乃吏人おりしゐ。二親おがら世を早〳〵孤獨とおりしより。觀音寺乃會下ゐ參ぐて。學乃窓ゐ螢雪を伴ふを。八九年。内典外典いへば更〳〵。兵籍歌集小說まで。諳んぜぎと云をおし。然れども西海は經高が亂れゐよりて。地上の風波穩ゥおらぎ。さらでも田舍は官途ゐ遠ゥり。いうで東ゐ赴坐く主どりせむやと思へども。身ゐ擔石の儲おなれば。万里の旅宿というぎはせん。彼青蠅の千里をゆくゐ。驥尾ゐ附くゐあらぎば。志を遂難しと思量りつ膽太くも。御内人とおしらへく。是迄御供仕りぬ。御制禁を犯せし事其罪萬死ゐ當れども。窮鳥懷ゐ入る時は。獵師も之を捕らぎといはぎや。旅は道伴。世は無愛。猶且御庇を仰ぐのみ。其姓は蛯口氏。歌二郎と呼る者。觀音寺へ人を走らしゝ問せ給はゞ分明ならんと。おそ〳〵演さりけ彼辯舌最も爽ゐゝ。現理りゐ聞へしゥば。吉次思ひ惑ひけん怒氣を斂めゝうち頷坐陳ぜる趣虛言おらぎば。最憐むべ坐者ゐこそ。今試みゐ問ふよしあり。海上月明ゐしゝ。金波巖を洗ふの夕。詩を吟ぐ節を拍。おは世の雅客の游ゐ去ゝ。玉笛の聲聽ゐ勝さり。然れども只弄ぶのみゐして。笛を何等の物と知ぎば。真の好事とまるゐ足らぎ。笛の濫觴はいうまぞや。と詰問れて些も擬議せず。宣ふ所寔ゐ然へ。夫笛ゐ雅笛あり。又光笛あり。雅笛を樂ゐ用ふべし。羌笛は胡笳の類おり。其形制と所始と。舊說總ゝ同ぐうらぎ。牢周禮を案ぎるゐ笙師は篪篴を教るとを。掌るものと見えさり。或は云。漢の帝武の時。丘仲始ゝ笛を作をり。又一說ゐは。羌人より起るといへり。漢の馬融が賦ゐ由るゐ。長笛空洞底剡なし。其上孔は五孔おり。一孔は背ゐ出ゝ。今の尺八ゐよく似さり。季善これが注を下ゐ。七孔は長一尺四寸。こは今の横笛のみ。太常鼓吹の部中ゐ。横吹と云即是おり。おゐ詳ゐせまく欲せば。馬融が賦を照ゝ考給へ。こゝ崖略ゐ候。と懸河の辯ゐ說諦を。奇才ゐ惑ぎる吉次は。頻りゐ膝の進むを覺えぎ。思ひきや今の世ゐかゝる少年あらんとは。經高は只武勇ゐ誇るゝ。よく人を知る眼力足らねば。纔ゐ清繩一箇を用ひゝ。この蛯口を任用せざるは。又只國家の洪福へ。彼清繩は經高が范增さるべ坐ものおれども。運竭ぬれば自らゥ測らぎ。愛ゐ飛鼠渡の君


玉笛を鳴
さて歌二郎
瀬川吉次を
うんと
論破せ
姥口歌二郎
瀬川吉次

と棄て。身は龍華の旅宿に死しさり。清繩既に亡びては。經高は禽にして。翅おれものに似さり。滅亡せんと眼前おれども。事果ぎしく歸るを。遺憾限りにこそ。といひつゝ嗟嘆あさりしが。歌二郎微笑く。そは又宣ふとおがら。彼牛淵九郎が如死。謀ありと雖も。己を知り、敵を知らねば僅に潜謀の術を頼く。其處ふ自滅を取きるのを。さればこそあれ兵書にも敵と知り己を知りく戰ふものは必克。敵を知りく己をあらぎ。己を知りく敵をあらねば。兩おがら必危く。敵をあらぎ己を知らで。戰ふものは敗るといへり。經高は無謀の猛將僅に孤城に依ると雖も。實政ぬしは遠慮に過く。還て時を失ふのを。今攻べ死を攻ぎしく渠が自滅を俟ものは。是弱將の所行にして。天の是を失ふもの歟。孫子ふ。將は英雄の心を攪と云よしを。合点せられぬ故にやあらん。縱此度の軍に克とも。經高を擒ふせんを最覺束おく こそ候へ。かくれば單呆ずしく。鎌倉へ召れ給ふは。君が幸おらぎや。といはれて吉次駭くまでに。いよ〳〵嘆息する折ころ。遠寺の鐘の聲遥ふ聞えく。宵は子の真中におりふけり。吉次耳を欹く。二六時中の鐘の數。六より六に迫ると。大玄經ふ由るといへど。まゞ具おるよしを得おらぎ。深意あるべしいふふぎや。と問ふに歌二郎又答て。其 甞南村が納音の編を閲せしふ。金の音は四九ふしく。木の音は三八に。水の音はこれ五十。火の音はこれ一六。土の音は二七に。これを不易の論と云。何をもておこの云ぎとおらば。甲己子午は。其數おれ九つに。乙庚丑未は。その數これ八つに。丙辛寅申は。その數これ七つに。丁壬卯酉は。その數これ六つに。戊癸辰戌はその數これ五つに。己亥はその數これ四つに。かくまば。今の鐘の數は。六十甲子納音の。音數によまるのを。又疑ふに足るものおらぎ。と問るく毎ふ古言を引く。辨才博識意外に出れば。吉次頻ふ感服しく。これけふまでもかくる才子と識らで過せし悔しさよ。おろはあれども今宵目今。この良緣を天の賜もの。好友を得て胸中の徒然を慰らるくは。これ生涯の大幸に。敢ふ學問せはほしきは。其曾夜學しく。淵鑑類函と繙紀しに。其書の中にはいへ經をあり。元姚桐壽曾云。大漠迤西俗。能羊を種るとあり。凡羊を屠るもれ。其皮肉を啖了。惟其骨を留置て。初冬末の日を以く。埋てこれを地中に藏春陽季月上の未ふ。笳を吹て呪語をれば。子羊ありて土中に出。凡其骨一具を埋て。子羊數

隻を得ると云。蓋四生胎外の。亦是一化といひつべし。波斯國ゐも亦おの事あり。脛骨をもて種るとゞ。輟畊錄ゐ又云。漠北ゐ羊角もて。これを地中に種る時ゐ。よく羊を産をるゑ。其大兎の如し。これを食へば肥〻美し。劉子觀が薫編ゐ。晉文ゐ菜を種つ。曾子ゐよく羊を種さり。非性闇蠢。方隅を辨せゞ。其運大おるとも〻。小務ゐ習ゐゞとある細註ゐ羊の皮を剝てもて。おれを土ゐ種るゑ。西海ゐゐ羊の臍も〻。土中ゐ種て水を溉ぎ。雷鳴を聞く時ゐ。臍糸地中ゐ生出つゑ。長ぎるゐ及〻ゐ。これを駕をるゐ木とも〻栩とは。其臍斷れ〻よく便行。又よく草を齧ゐ至る。秋ゐ至て食ふべし。臍の内ゐ種あり。と四百三十六巻ゐ見えさり。この事尤疑ふべし。もし羊の骨を種〻。子羊夥得さらんまゐ。是則理外の事ゑ。されども宇宙ゐ理と性のミかゑれば理外の理と云もの。又あるべくもあらぎゃし。和殿の論辨聞まほし。といへば歌二郎うち咲〻。今愚按とも〻云時ゐ。そゐ獸の羊ゐあらで。羊ゐ似さる草なるべし。近屬或書と閲せしゐ。魯西亞國ゐ一種の奇草あり。「シカプコロイト」と呼おしさり。(羊草と譯をるもの是なる)莖と抽〻實を結ぶ。形宛羊の如し。又其皮ゐ毛と生ぎ且其傍ゐ生る草ゐ。さおがら獸の墜さるが如し。其實と割ば赤液あり〻。宛然とし〻血の如し。食べば味ひ蝦ゐ似さり。これゐ是同國おる。亞私太蠟甘ゐありといへり。顧ふゐ唐山おる文人墨客。是等の事と認傳へ〻。真の羊の地中より。生出ると思ひしより。正者ゐ物ゐ識せしのミ。唐山の書籍ゐ異邦遊歩の事と載せしゐ。皆傳聞の認多さり。縱ば彼がこの土の事と。記せしと見〻猜をべし。笑ふゐ堪さる事ゐこそ。と云ゐ吉次小藤を鳴らし〻。感ぎると半時ぢさり。歡しげゐ頭と拊〻。目今博士の指南ゐより〻。多年の疑惑氷解せり。おれども是等を浮世の雜談知らでも害のな紀事おがら。知らで恼ゐぬ一條ゐ。海賊追捕の當仕へ。見さる如く大將より。勇卒百名を隷られ〻追捕嚴重さるべ紀旨この命令を稟しさば。獨ゐ矢田の津を出しより。心と潛め〻張ふゐ。今宵迄も賊船ゐ。似たるもゐが目ゐ遮らゞ。こゐ泰平の兆おる歟。さらぎば出没時ありく。これを怕れ〻隱れし歟。和殿素より知るよしあらば潛やのゐ告給へ。功成る時ゐ功を讓ゐて。恩賞ゐ鏹倉ゐく。申請おば行きん。聞さる事ゐこれおゐ紀やと。潛紀問へば歌二郎ゐ。呵々とうち笑ひく。そゐさもあるべ紀事おがら。盜賊とば鎮

むべし。盜賊い捕ふべからぞ。よしや幾般幾人の海賊と驅捕るとも。世上の賊の盡るゑ非ぞ。然れば盜賊ありと云共鎭倉殿の武威衰へぞば。渠甚麼ぞありの事とゐせん。凡塵埃と避るものい。戸を閉て是を鎭む。盜賊追捕も是ゑ同じ。鎭る時い渠又出ぞ。強て搦捕んとをるい。塵埃と憎く拂へども。拂ふ迹より其塵埃の。いよ〳〵積るゑ異ゐらぞ。只打捨く措給へ。といいせも茉ぞ吉次い。膝立直し敬固く。和殿の意見い迂遠し。細人を德ゐ親まぞ。威ともて是を懲をべし。況く兇暴殘忍ゐる海賊の徒とや。これ今夥の猛卒と。伴ひゐがら只一箇の賊とぞも得捕へぞしく。阿容〳〵とし〳〵東ゐ歸らば。仆職ゑ居く其甲斐ゐく。世の朝應ゐゐらんのこ。これ穿鑿て其巢を破り。塵ゐ去て見をべ紀ゐ。爾時和殿奈何とをるや。奈何とをるや。と勢ひ猛く。從ふ氣色ゐのりしを。歌二郎い些も驚がぞ。天うち仰ぎて呵々と輙ぶが如く笑ひしが。忽地貌を更めく。佶と吉次ゐうち向ひ。瀨川氏よく聞給へ。世の人魚ゐ非ざれば。よく其魚の樂と。知らぞといひけん譬ゑ等しく。各賊ゐ非ざれば。いゐでゐ賊の情と知らん。今い誰ゑゐ慝むべ紀。これも亦海賊ゐり。嶷しくば目ゑ物見せん。といひつゝ舳頭ゑ立出く。遽しく懷と摠ゑくとう出る叫子の笛の。音も瀧々と吹鳴らせば。怪むべし海上より。忽然として涌出る賊船をべく數十艘。惡鬼ゑ等し紀暴雄の。其數無應數百人。半弓と驚鉾と舞して。瞬間ゐ近づ紀来つ。素破といいぞ射く落さん。といいぬ計りゑ鏃と揃へく。吉次ゐ船の四方を。稻麻の如く捕卷さり。思ひがけゐ紀事ゐれば。さしも猛ゐる吉次すら。おゑ〳〵いかゑと計りゑ仰天しく聲と出さぞ。況て同船の兵士等い。呆れ惑ふく今更ゑ防ぎ。戰んとをる。擬勢もゐく。或い射向の袖を翳して。逢庫ゑ伏をもあり。或い苫を引被ぎく。念佛をるも多ゐりけり。當下燒口歌二郎い。又吉次を見ゐへりて。瀨川氏見給へりや。御邊百名の士卒あれば。これ千名の手下あり。小い大ゑ敵をべゐゐぞ。御邊これを捕へん歟。これよく御邊を殺をべし。然れども御邊い忠義の武士。其才も長されば。其死と偕しく別きんのこ。是ゑ懲ゐば海賊と。追捕の念と斷給へ。強て功を貪らば。又大ゐる禍あらん。是等い初度の小厄のこ。つら〳〵御邊と相をるゑ。飼雞の厄。近紀ゑあり。かくれば己が手ゑかけぞとも脫れ難きゑ似されども。深信しく自ゐゐ守らば。安危とゐくゑ說べゐゐぞ。むゐし御史周維卿

（こゝに出る解厄の神呪いうきたることとあらぎこと明宋の周密が癸辛雜識に載する所誦するものいと益ありといへり）

が。解厄の神呪あり。日毎にこれを誦するものゝ。紛難横難。寃枉の罪厄をべく。解ぎといふとおゝ。いで〳〵といひうけく。徐々に誦するをうち聞けば。

答侄他。　唵呿罷吽呿哆　呿囉呿吽哆

呿叮吽哆。羅呿吽哆。囉呿吽哆沙呵

かく誦すること五六遍。こゝ高王觀世音の。夢中示現の神呪こゝ。これと授けく留別の餞とかをものゝ。この處まで便船の。酬ひに充る老婆心。よく記憶せば利益あらん。命めでさく緣竭ぎば。おほ再會に意中を竭さん。僉退々。と領もて。下知〳〵裳を褰つゝ。三間むうり右手おり々る。船ふ閃りと飛乘ぎば。月朦朧と靄降く。今まで有つる夥の船の。往方も知らぎおりにけり。

第十二回

動の磯に高濤亡骸を引く

吉次は忙然と。初く夢の覺さる如く。且差く憤の遣る方もおぼものゝ。然りとても。又詮術非ぎ。熟思ひ旋らをふ。纔に一百餘名おる。兵士を頼ぎしより。海賊追捕の事に誇るく。彼歌二郎に懲されゝゝ。井ふ棲む蛙の大海を。知らざるに似く器量陝うり。かゝれば亦愁ふ。此輩を伴ふく。鎌倉迄も歸る參らば。讒者不測の舌ふかゝるく。遷く君の御疑ひと。釀をる事のあるべ紀歟。是も亦測り難し。所詮綷に假托く。此百名の兵士を。矢田に返をに增ものあらぢ。と深念をつく其曉方に。近紀湊に船を歌させ。扨兵士等に談するやう。おゝらるゝ如く海賊の。出沒尤不測おるふ。かゞりの小勢にく。追捕せん事容易うらず。然るをおほ迴々と。各位と東迄相伴ん事無益に似さり。かゝればおゝより。各位は。陸路を矢田へ還り給へ。有然分殿（實政といふ）に申さんにはゝ。西海の波靜にしく。海賊盜船有事おし。よをく隷させ給ひぬる。士卒を返し奉る。經高未ざ誅伏せざれば。彼城攻に用させ給はん事を願ふのゝ。こゝ人々の情愿也。吉次が懈怠に非ぎと計りにして歌二郎が。事おどゝ沙汰をべうらず。此一條の不覺によりて。吉次は罪被る共。今更解をる所ふ非ず。但各位と連系せん歟。こゝ最惜し紀限りおり。心得給へと。說曉せば。衆皆齊一歡び。又往末も乍麼おらん樂にあふ歟と思ひし。はおゝより歸れと。許されゝゝ。おほ氏神に棄られぬ。託誼ところ覺され

仰うけぞり候ひぬ。公殿まゐ教諭の儘まに聞え上候ゐん。眠中を。と身を起を。傳馬除上の水の葉武者。落支度をる似くまく食動也〳〵と港口おる。船場まに集合ふて。出くゆく。船と遥まに目送りつ。歸る間も浪高紀。其順風ゐ真帆揚く。別々ゐおりまけり是よりまく吉次ゐ。主從纔まに五六人。船いと輕くおりければ。走る事も亦速く。日毎に風のよろまくしらば幾日もあらで攝津おる。尼が崎まゑ著ゐける。是よりゆくくも船おらば。遠江灘七十里。春も順風稀ん。と聳く聞さる事くもあれば。吉次ゐ此湊より。船を返くく。大和路より。東海道と下る程ゐ。歸心漸く矢の如く。日ゐ十餘里の道を走れば。其如月の下旬ゐ。もや駿河路も打過く。菅根の畑ゐ宿とりつ。其宵孤燈を搔起くく。書寫さる消息と。足最早紀奴隷ゐ齎くく。紫内の爲鏑倉おる。博多倍太郎が宿所へとく未明ゐ立くく遣くさる。此日よりくま。道と急がむ。靜ゐ菅根試打踰く。其薫昏ゐ主從五人。袖志浦の波打際おる。松の樹間を彼此と辿るも長紀真砂路の。波ゐ足をゐ取られそ。と聲とかけつくゆく程ゐ。天ゐ俄頃ゐ結陰る。海さへ黑くく紫初さり。不題去歳よりくて。伊豆の山家ゐ隱き住む。鼠川嘉二郎武行と。長城野兵太敦宗ゐ。襄ゐ

博多彌四郎の。若黨闘裝七が秋布の使とくく。西國へ赴くころ。途まく竊ゐ擊捕れとく。講第の奴隷勘八まに。功成く後恩賞と。宛行んと云一通の。手形と取らくく遣せくま。其約束の日數經く。俟ども〳〵勘八が。信絶くおらくかば。兩人竊まに疑ひ怕れて。勘八をもく爲損ぜく歟。毛と吹紀疵と求めおば。螟の塔より斑崩れく。是回の伎倆發覺なば。いかぞをせんと阽くく。安紀心のおきものらく。然とく爲出き事もおく。只勘八が弟おる。貫九郎といふ。小厮ゐ。將軍惟康親王の。奴隷部屋まに歌り居て。部屋子とう呼るくのを。奉公もせで鏑倉まに舊の儘まくく在くらば。是究竟と招紀よせて。酒試飲せ物と餉ませ。おほさはく〳〵ゐおくらへく彼地の間者ゐもくけるゐ。さる筋まゐ惡功長く。脫落もお紀ものくければ。瀨川が妻の秋布が。良人へ贈る一包の七里の濱へ流寄く。ゆくりおくも執權の。御目まとはりく絆の疑こ。故ゐ吉次と召返さるく御使まに。博多倍太郎を西國へ遣されさる機密の顚末。又博多彌四郎ゐ。女兒の爲ゐ壻吉次が。凱陣と祈る願文まに。征箭二條と取添く。鶴岡へ納く事まで。大らさおらぎ勝課せく。綽云云と報くのば。嘉二郎兵太ゐ雀躍くて。再生くる心地おつ。秋布が

彼一色に義七ゐ齎し〻。矢田の陣所へ遣しさらんゐ。彼處へに届らぢゑ〻。七里の濱へ打寄られしと。思へば義七に船中おどゐ〻。勘八ゐ撃れしおらん。又勘八が歸らぬに。相撃ゐし〻共侶ゐ。命を隕せしものおるべし。勘八さへゐ撃れおば。渠が口より支と漏を。後産病めゆばいよ〳〵めでさし。かゝるばたや遠うらぢ。瀬川采女に歸り来つべし。彼奴と途中ゐ狙撃〻。日比の怨と復さぢば。臍と噬とも及べうらぢ。扨吉次と結果〻。おほ鎌倉ゐ程近紀。おゝらどらんに甚危し。其處より遠く走らんゐ。路費おくてに不便へ。いうぢせんと。額を病し〻。兩人商量をる程ゐ。嘉二郎思ひたくよしあり〻。一夕貫九郎を使とし〻。内管領頼綱が宿所へ竊ゐ遣しつ。俺們若氣の跡忽ゐよりて。御勘當と受しより。斯長々し紀浪宅の貯録殫〻飢渴ゐ及べり。哀れ叔姪の義ゐ愛させ給に。些の合力と賜へうしと。最哀しげまいにせしうども。頼綱に大く怒り〻。承引べくもあらざりしと。乞ふと再三ゐ及びしうば。頼綱竊ゐ思ふやう。嘉二郎が罪憎むべく。憐むべ紀ものおらねども。渠今貫ゐ飢渴ま迫らば。いよ〳〵不良の所行とやをべ紀。然る時に渠のミおらで。我も亦面皮を鉄く。恥のうへの恥おるべし。遣回に且密々ゐ。拯ふま不如。と尋思をしつゝ。緊しく向后を誡め〻。金一裹を遣しけり。嘉二郎に此便宜を得〻。歡ぶ事大うさ限らぢ。貫九郎ゐに些計りの。金をとらせて辛苦錢とし兵太ゐも如此〳〵。と由を報。意中と示して。既ゐ盤纏のいで采ゐければ。采女が歸て来る路ま。埋伏しを。怨を霽し。そが儘他鄕へ走らんと〻其次の日より貫九郎と。貌姑峯の方ゐ遣しつ。吉次奴が歸り来る。時日と定うゐ捜索め〻。とく知らせよとゞ分付ける。かゝて程ゐ睦月に過〻其如月の末つがさ。豫て斥候ゐ立さりける貫九郎に。喘々伊豆の隱宅ゐ歸来つ。頼川采女主從に。昨夕貌姑峯ゐ宿とりさり。思ゐ此貫吾比ゐに。大磯小磯と打過〻。日に兼るとも鎌倉へ。參り著んと急ぐらめ。遣過してに詮ゐ紀所行ん。とく〳〵准備をゑ給にせや。と呼吸吻あへぢ報るゐおん。嘉二郎兵太に雀躍しを。ろに俟らゆさり。足場もよし。脱落にせじ。と應も果ぢ。各々身輕ゐ打扮つ。豫〻より逐電の用意をゑさりしうば。只荒来さるゆ屋と。住棄るのミ惜むゐ足らぢ。投て往方に定めねども。鮮十二分ゐ整ひければ。嘉二郎兵太に征箭と背負〻。半弓を脇挾ま。貫九郎に短鮮と引提〻。人も通にぬ山路しつ〻相模路へと

く急ぐ程ゐ。とゞ鎌倉へ遠からぬ。動の磯ゝ来さりけり。此時日ゐ稍傾紀く。下晡と覺し紀ゐ。此地を總て真砂路ゐく。右邊ゐ渺々さ拡蒼海原より。打寄せる波の音高く。左邊ゐ人家遐くく〳〵處々ゝ磯馴松の。生茂るさる隈多らり。おを究竟の地方ぞとて。主從三人足場と揣るて。三方ゝ立別れ。松の樹蔭ゐ躱ひて。吉次が歸り来ぬると今歟〳〵と俟程ゐ。其日も既ゝ暮初て。汐風寒紀黄昏時。袖志動の浦傳ひして。貌姑峯の方より来る者あり。漾おるべし。とおおさの主從眼を定めく遥ゐ見るゐ。吉次ゐ馬上ゝく。若黨馭奴等。主從纔ゐ五人ゝ。箭比近くおるまゝゐ。一の箭伏ゐ鼠川嘉二郎。克驚蹶と發つ矢坪の寃違ゐぞ。吉次ゐ左の股と太く射さして。馬より揑と落しちゞ。おを〳〵いらゐとぞらりゐ。走聚ふて立騷ぐ。從者さへゐ脫さぐとく。兵太が頻りゐ射蒐る征箭ゐ。背を射られく俯をもあり。或ゐ又頸骨を。射らるく矢庭ゐ死をるもあり。そゞ中ゐ辛くして。脫れて東へ走るものゐ。只一人ゐ過ぎりけり。綷既ゐしく爲課せし。長城野兵太ゐ吉次が。頸と捕らん。と弓投捨く。太刀拔羽し走り来る。仇敵と欺引寄せん爲。射られし儘ゐ身も動かさで。虚滅をしさりける。吉次も亦呼吸を揺りて。程こそよけれ。と拔擊ゐ。卧しつゝ兵太が向臑と。ぞらりぞんと斫拂へゞ。兵太ゐ隻足と砍落されく。臀居ゝ撲地と倒れさる程もあらせず貫九郎も。短鉾を拈りく走り来つ。えや立躍る吉次が。高脛と又ぐさと衝くゝ。癸所ならねば物どもせざりし。吉次ゐ返す刀ゐ。鉾の柄丁と砍取く。矢鱈とうけて撫つ手煉ゐ。貫九郎ゐ脚より。卿まで縫串さて。苦と叫で仆さる。そゞ隙ゐ吉次ゐ。兵太が頸を搔んとて登しかゝて刺脫を。兵太ゐ下より握留めく。深手ゐ屈せず引組で上を下へと捺あふ折らさと降そゝぐ疾雨ゐ初。電初雷。間おく時おく鳴るさる。足柄山下風烈しくく。荒磯と洗ふ高濤ゝ組ざる兵太吉次ゐ打放解れつ忽地ゝ。兵太ゐ遥ふうち揚さく。松根ゝ立つ磯石ゝ頭を大く撲摧れて。腦糟出く綷絶さり。吉次ゐ引く波ゝ。引れく澳ゐ漂ふ儘ゝ。浮つ沈をつ存亡も。往方も知れぬおりゐけり。有然程ゐ嘉二郎ゐ。鄰ゐ兵太を資んとく。弓箭と其首ゝ投捨く。走り出んとをる程ゐ。疾風雷雨凄ぐく面と向んやうのおければ。怕さく樹蔭ゐ退紀つゝ。霎時霽るゝと俟程ゐ。兩歇と雷電斂りく。暮ぬと思ひし天ゐおゐ明くなりゆく夕映の海ゝ遣りて幽なる浩風

動の磯ふ
二兒
吉次を擊
相川四郎
相川弓五郎
こうん九郎

に騎馬の武士の。鎌倉の方よりして。こゝをさを望て来るにやあらん。鑣々さる轡の音れ間近く聞へしゝば。嘉二郎耳を敵て。序次ゐろゝと。足ばやに迹と埋めく。逃亡々りされば又。博多倍太郎正延ゐ。吉次ゐ先だちて。鎌倉へ歸著しつ渠が女の喪によりて。聊遲參の支の趣。并ゐ牛淵清繩が謀伏の爲体を。時宗朝臣に聞えあげて。とさ〳〵其到著を。えや三四日と俟さるゐ。此日貌姑峯の畑よりしく。吉次が使札到来しく。今宵の歸府を報しゝば。倍太郎ゐ又是等のよしを再び主君ゐ聞えあげしゐ。時宗ゐ日比より。俟うね給ひし事ゐれば。亭午の比より幾遍とおく。采女ゐ歸り參らぬや。と諮問るゝ事頻りも是により倍太郎ゐ自ら途まで立出て。吉次と迎へんとて。闇綾笠ゐ野襞束しく駿馬に打跨て吉次が使に立さる奴隷一箇に鑣ゐ試とらして。其日未下刻鎌倉と立出つゝ。馬の足掻ゐ早めにければ。其曉昏に大磯や。小磯の地藏堂まで来つる比。天猛に結陰て雷雨頻りゐ降そゝげば堂の檐下に馬と倚せて。霎時霽間をまつ程に。勳の磯より逃れ来つる。吉次が從者の笠宿りせん爲に走りて堂内ゐ聚合しゝば。こゝに初て倍太郎ゐ。吉次が横難ゐ。定りに知りく大く驚ゐ再び馬に

打乗て。件の磯へ急ぐ折。雷雨ゐ既ゐ霽されば。途ゐて蕉火ゐ買とらせて。只一息ゐ乗著しゐ。讐敵ゐ既ゐ逃亡けん吉次が死骸ゐおし。只長城野兵太が顱を破られし。深手の死骸ゐ松の下おる。磯石の邊りに在り。只是のみゐ非ぬおく。嘉二郎が方人おる。奴隷貫九郎も深手を負ふて。半死半生おりけると。犇々と。めく。緣故と責問ふゐ。貫九郎ゐ苦痛ゐ得堪ぬ。嘉二郎兵太が諜しく合しく。あゝゐ吉次と撃しく事且吉次が亡骸ゐ。波ゐとられく往方とおらぬ。と定りに首伏おさりしゝば。倍太郎ゐ四下近紀。浦人等と召聚へく其胥吉次が亡體を。索出せ。と下知しく ければ。浦人等ゐ獵船と。いくらともなく漕浮めく。或ゐ鈎と板子ゐ乗し。或ゐ鈎索と繰御しく二時餘り索しゝども。亦其甲斐もゐ紀ゐより。倍太郎ゐ思ひ拾く。且浦人と退し。兵太が首級を齎しく。貫九郎と追立〳〵。其曉方に鎌倉おる宿所へ歸り著とそが儘。件の支の趣を。博多彌四郎へ報知らせ。彌四郎ゐ亦人ともく。瀬川が宿所へ走らしく。女兒秋布に告さりける。凡其方さまの駭嘆悲泣と。其ゐいゐんゐさをゐゐく〳〵しく に綽省ぬ。看官宜しく猜をべし。有斯て博多倍太郎ゐ。其諾旦出仕しく。即使主君時宗朝臣

へ。瀬川吉次が枉死の事。鼠川嘉二郎長城野兵太が。夙怨の事れ一條をべ〻い奴隷貫九郎が。首伏の趣ともて告まうせば。時宗駭紀且怒りて。彼嘉二郎兵太等い首を刻べ紀者共おり〻拭。頼綱が面ヨ顧て。其死を寛め〻追拂いせ〻が。恩を受て恩と思いぞ。私の怨をもて。愛臣瀬川吉次と。撃果せ〻ころ奇怪おれ。這奴等が惡吏いそれのミおらど。彼貫九郎と云奴と。拷問せ。よと下知〻給へば。當職の有司奉ヨ〻。貫九郎を獄舍より牽出し。背と割骨を挫ぎ〻。最嚴〻く責さりければ。貫九郎い得堪ぞ〻。嘉二郎い奴隷勘八ともて秋布が使關義七と。道中ヨ殺させさる。其事乃始めより。其後貫九郎ともて間者と〻。吉次一家の事ヨ預る。鎌倉中の風聲と聞定め。此度吉次が歸ると知り〻。埋伏おさる綽の趣其處ヨ怨と役をヨ及び〻。直ヨ逐電せん爲ヨ。竊ふ叔父の頼綱ヨ。路費と乞〻密吏まで。其奸計十ヨ〻。八九と首伏〻ければ。時宗此よ〻と聞給ひて。今い其奴ヨ所要おし。と〻罪ヨ行へと〻。遂ヨ頭と刻られけり。是ヨより。内管領平左衛門尉頼綱も君邊猛ふ首尾反ければ。引籠てゞ居さりける。有然程ふ時宗朝臣い。經高誅伐の禱の爲。次の日鶴岡へ社參あり。霎時額づき。頭を擡〻。四下とつら〻視給ふふ。素木の小四方ふ。征箭二條と打乘おく〻願書め紀さる一通あり。間近く侍坐〻さる。社僧を見歸り指〻〻。彼い近屬納〻もの歟。願主い誰ぞ。と問給へば。社僧答て。さ候。最ふ御内人博多彌四郎が。宿願の旨ありて。進らせさるヨて候。と事もおげヨ申をヨゞ。時宗さてそと領紀て。軈〻願書ととり卸さ〻〻讀〻て是を聞給ふヨ。そゞ中の文言ヨ。經高誅伏せすといふとも。吉次と逃ヨ。凱陣あらせ給へと寫せ〻。一條と聞咎め〻。屢〻〻社僧ヨ讃返させて。扨宣ふやう。我今思ふよ〻あれば。願書をておさへ遞與をべ〻。征箭い且く預け措く。心得〻歟。と云諭〻つ、社壇と出〻悠々と前驅後從の目覺〻紀。吒咤の聲松吹く音も。枝と鳴さぬ執權の威風逞く鎌倉山。御館へ歸ヨ給へども。疑心暗鬼と生ぜ〻より。とヨかく思ひ安うらねば。次の日内管領頼綱の邸と訪〻招紀寄て。きのふ鶴岡へ社參の折。計らぞも其意と知ヨさ乾。博多彌四郎素延が願書を取出〻指示〻。抑經高西海ふ。跋扈〻〻よヨ既ヨたゞ。呵責ヨ反べども。元兇本ど誅ヨ伏せず是故ふ時宗を。魂と痛〻め。神ふ祈ヨ佛ヨ念じ〻。只逆賊の速ふ滅ん事と欲を乾ふ博多彌

四郎何ものかれば。主の憂と憂ひとせぞ。其私の情ゐ任しく。渠が女兒秋布が。良人と慕ふを慰めうゐてや。のくまで氏神と驚し奉り經高詠伏せぞと云とも。吉次を速ゐ凱陣ゐさせ給ひね。と書さる願書ゐ何事ぞや。其不義不忠言語同斷。罪反逆ゐ等しかるべし。速ゐ召よしく。誅伐をべ紀者ゐ非ぞや。えやく捕手れ准備をさせよ。と敦國猛く命じ給へば。頼綱眉を打顰めて。御諚でゐ候へども。彌四郎ゐ素朴の循臣。野心あるべくも候ゐぞ。渠文墨に疎ければ。其心ゐも非ぞしく。さる僻言と記せしもの歟。且其由を糾明ありく。陳ぞる所其よしあらば。おゐ穏便の御沙汰を。といゐせも果ぞ時宗朝臣ゐ。頭と左右ゐ打掉ゐく。頼綱ゐ羹ゐ懲りて齊韭と吹んとをるや。彌四郎疎忽の愆さりとも國賊の死と祈らで。君と否をる罪あるものと。免さば誰か從ふべ紀。大凡使と遣しく。罪の疑し紀と質を事ゐ。尋常のうへゐあり。もし是とし忍ぶべくば。何事とう忍ざるべ紀。とく〳〵捕手の准備しく。彌四郎を召寄よ。無益の諫ゐ聽く隙非ぞ。と日比よも似ぞ氣色損じく。寛むべくもあらざれば。頼綱太く畏りて。形の如くよ計ひける。有爾程よ。博多彌四郎素廷ゐ實子よもまを愛壻の。瀬川

采女が横死の宵より。歎紀最増す秋布を慰めかゐつ日比歴く。老の憂苦ゐ朽折ゐつ。病むとゐおしよ勤仕と怠り。垂籠くのをゐさりしよ。忽地召狀到来しく。速ゐ出仕せよとある。火急の君命ゐ打驚紀。驚く禮服と整へく。御館へ參る道すがら。向寄よければ遽しく。瀬川が宿所へ立よりく。召ゐよりく勤仕のよしと。女兒秋布ゐ告しかば。秋布ゐ。つく〳〵と。聞つゝ霎時沈吟じく。昨夕ゐ夢寐の歹かりしゐ。けふゐ朝より何とおく烏啼の常おらぬも。心よかゝを侍るかし。且く病氣のよしと申て。御館のやうと伺ひ給へ。と云をば聞かぞ彌四郎ゐ。呵々と打笑ひく。ろゐ此日比憂よ沈める。そおさの心の迷ひのゝ。君命じく召時ゐ。駕を俟ぞしく行といゐぞや。況く嘉二郎兵太等が惡事いよ〳〵露顯しく。吉次と惜せ給ふ。主君ゐ御疑心あるべしやを。名迹の事おどと仰する。吉事と覺るよ。退り出ると待ねかしといひあへぞ。從者をいそがし立て走去けり。既よしく彌四郎ゐ。御館よ參て者しかば。鈴の間の青侍。鴎石林平。鰐口愿六。逸早く出迎へく。ゐが君よゐ先の程より。侍らねさせ給ふかるとくこおさへ。と先に立く。誘ひさ程彌四郎ゐ共よせゐしく進をつゝ。大鳥の間ゐ近づく

偽筆の願文
博多弥四郎殺
時むね
十九

そうこ弥四郎

程ゝ。左右ゝ垂さ玆帷幕の陰より。顯れ出さ玆力士四五名。博多彌四郎且く留ま。逆徒經高ゝ荷擔〳〵。君と否する不忠の大罪。遂ゝ逃れぬ天の責仰ふよりく誅するぞ。と名告りけ呼留めく。群立蒐く前後より組んとするを。揮放釋く。彌四郎い吏急おれば。一句も陳謝ゝ暇おく。心得さり。と云まゝ。ゝ。掻捆ミ投退る老の膂力も一生懸命。霎時い寄せじ。と角へども。竟ゝ多勢ゝ推伏られく。幾刀とおく刺れさる。五體い續く處もおく。血ゝ塗れてゞ死〳〵さりける。時宗朝臣い此折ろ。頼綱拭從へて翠黛の裡面より齎しつ。者共死骸と取捨く。早く不淨を清めよ。と云ひゝ後堂ゆぞ入り給ふ。嗚呼、君の寵もたのむべうらず。時宗賢良おらぬゝあらねど。只狐疑の一僻あり。是ゝより其罪の。疑〳〵き拭。寛めざ〳〵拭。程歷く悟るよ〳〵ありて。頻りゝ後悔〳〵さはひけり。然りとく其甲斐あ玆ゝあらず。曲の膳拭拉ぎて。亡者の汚名と雪むべ〳〵。切く もの事ゝ覺えく哀ゝおり

松浦佐用嫒石瑰錄後編卷之一　終

昭和大阪 受入 第29,938 昭36.3.14